

「究極のいやしをする神様」 ～だから私たちは支え合わなきゃ！！～

マタイ20：27～34

神は最初の間であるアダムとエバにこの地上を支配するようにしました。しかし彼らは神との約束を破ってしまいました。その時、神に悔い改めることができずに責任転嫁を行った故に、エデンの園を追い出されてしまいました。それが原罪として残り、私たちは意識していないと自己義によって悪い方向へ向かっていってしまったり、責任転嫁や隠蔽、逃避などの行動へ向かわせてしまうのです。（マタイ20：27～34）今日の箇所では目が見えない人が出てきます。この当時、彼らは人として最低限の生活すらできていたとは思えません。現代のように支援があったのかもわからない状況かもしれません。そして周りの人々からは差別され、蔑まれていっていたと思います。私たちも自分と比べ、劣っている人を見るとその人を蔑んだ目で見てきたかもしれません。ですからイエス様が近くを通られた時、助けを求める声を上げていますが、彼らは“たしなめられた”のでした。あなたたちはひっこんでいなさいと言われんばかりの対応を受ける存在でした。今日の部分であるマタイ20章以降はイエス様の遺言とも言えるような箇所です。私たちがどのように生きていったら良いのか。イエス様はエルサレムに入城される時は大歓迎されました。しかし1週間後には十字架にかかることになったのでした。十字架にかかるように主導したのはパリサイ人でした。このパリサイ人とは律法を人間的に守っていても厳格な教えの中にいました。しかしそれを守れない人々を見下し、馬鹿にしていました。そして彼らは自分の言うことを聞かない人々を嫌いました。自分に従う人々を好みました。それは私たちも同じです。私たちも自分のいうことを聞く人々のほうが好きです。彼らは自分についてくるような人々を好みました。それに反発するような態度をとる人を嫌っていました。これは神の恵みからかけ離れてしまった行為でした。神様の恵みとは“いやし（healing）”、“励まし（encouragement）”、“導く（lead）”、“許し（pardon）”です。そしてこの英語の頭文字を合わせて【HELP】すなわち“助ける”ということになります。神様の恵みとは私たちが助けて叫ぶことができることですが、私たちが助けを呼ぶ場合、私たちは自分の弱さを認めることから始まるのではないかと思います。子どもを見るとよく分かると思います。子どもが転んでしまうと大きな声で鳴いたり、起こしてほしいと手を上げたりしています。子どもは自分が立てないことを知っているからです。ある程度大人になっていくと、転んだり、つまづいたりすると羞恥心の故にあたかも転んでいないように、つまづいていないようにごまかすようになっていきます。本当に神が教えたかったことは私たちが失敗した時に、素直に間違っていたことを認めれる環境を整えたかったのです。今日のタイトルは『究極のいやしをする神様』です。普通のいやしではありません。だからこそ、神に助けてと言うことこそできることです。私たちは素晴らしく造られました。しかし素晴らしい心が段々とずれてしまったのです。だからこそ、いやしが必要なのです。聖書では目の見えない人はイエス様に助けてほしいと願い、声に出しました。そして彼らはその求めに応じていやしを受け取りました。この後、いやされた人たちはどのようになったのでしょうか。（マルコ10：52）「するとイエスは、彼に言われた。「さあ、行きなさい。あなたの信仰があなたを救ったのです。」すると、すぐさま彼は見えるようになり、イエスの行かれる所について行った。」と書いてあるように、イエス様から“行きなさい”と書いてありますが、彼らは癒された後は“ついて行った”のでした。神の癒しとはその人がイエスについて行くことができる癒しでした。私たちは問題が起きるとその問題だけが取れるように祈ります。その問題が取り去られた後、どのようになるのでしょうか。究極のいやしとはその人本人が神についていくようになることであり、一時の目の前の癒しではないのです。ですから私たちは相手が変わるように祈るのではなくて、自分が変わらなくてはならないのです。（1コリ1：26～31）パリサイ人は自分が立派であると信じていました。ですから周りにいた人たちは見下していたのでした。大事なことは私たちが赦された罪人に過ぎないということです。私たちに常に助けが必要である存在なのです。ですから私たちは自分の弱さを知ることが大切なのです。聖書によれば救うという言葉はギリシャ語で“ソーズ”という言葉が使われています。これは健全や正常という意味があります。ですから目の前の問題から救うことではないのです。例えば、洗濯をしている最中にその洗濯機が動かなくなりました。その時、私たちは洗濯物のためにはいろいろするかもしれませんが、しかし洗濯機を直そうとはあまりしません。神の究極の救いとは洗濯物を綺麗する方法の中で洗濯機という手段を教えたのです。神は今の目の前の救いよりも永遠を見ているということです。ですから神の働く領域というのは私たちの思いとは違って当然です。神の視点はその人の永遠なのです。その視点にたつて私たちは互いに助け合う必要があるのです。もたれ合うのではなく、互いに助け合うのです。私たちは互いにつながりあっているのです。隣の人が倒れたら周りに影響が出るのです。そのために①『群集になるな』です。私たちは群集になると悪いことをしてしまいがちです。情でつながったり、愚痴でつながったりしてしまいます。私たちは互いに助け合うために近くにいます。群集として集団になったとしても互いには隣人同士であることが大切なのです。（1コリ9：22～23）弱い人がいたら弱い人の気持ちを理解していきましょう。そのために②『立場に立つ』のです。パウロは相手の立場に立つとうとした時、相手の弱さに近づいていきました。自分の弱さを理解している人は隣人の立場に立つことができますが、劣等感に生きている人は相手の立場に立つことはできません。弱さを通して相手に寄り添い、話を聴くことこそ、現代の医療の方法ともなっていることです。（1テサ5：14～18）この言葉は主からしなさいと言われている勧告の言葉です。ですから“できる範囲でやれば”という言葉ではありません。これは果たさなければならぬ命令です。まるで“雨にもまけず”の主人公のごとくです。③『頼るのは神様！！主よ憐れんでください。』私たちは寄り添って行くとき、主についていくようにしなければいけません。助けた人に依存するような関係になってはいけません。助けられた人は神様を求めるようにならなければいけません。それこそが神様の究極のいやしを受け取った時になります。それまで私たちは寄り添い、隣人として助け続けていかなければいけません。今週、私たちを通して多くの方々が主についていけるように寄り添って互いに助け合ってください。

（要約者：平澤 一浩）